

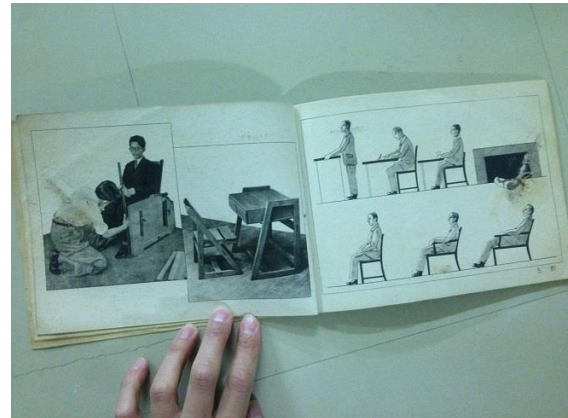
青森市所蔵作品展

歴史の構築は無名のものたちの記憶に捧げられる

ゲストディレクター：藤井光

青森公立大学国際芸術センター青森

2015年2月7日（土）－3月15日（日）10:00－18:00 会期中無休／無料



協力：青森市教育委員会文化財課、remo (NPO 法人記録と表現とメディアのための組織)、BLACKBOX、
青森空襲を記録する会

【展覧会概要】

青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）では毎年冬季に青森市所蔵作品展を開催しています。今年は映画監督で美術家の藤井光さんをゲストディレクターにお招きし、青森の人々の暮らしの中で実際に使われてきた民具や様々な資料（雑誌、紙芝居、教科書や文書など）と、青森の市井の人々が昭和30-50年代に撮影した8ミリフィルムの映像を中心に展示します。

民具は当時日用品として使われていたものがほとんどですし、映像には他愛もない家族の休日の様子や地域の行事が映っており、当時の人々の毎日の生活が見て取れます。その反面、時を経た現代の私たちが見るとそこには当時の社会状況を見て取ることができ、個人的な、ささやかにも見える暮らしの一時、一場面も大きな歴史の流れと無関係ではなく、歴史を形作るものの一つであることもまた、浮かび上がってくるでしょう。記録と記憶をめぐる架空の歴史博物館を描き出すような展覧会です。

【展覧会の特徴】

1 映画のセットのような会場

展覧会場には、映画のセットのように5つのステージを作ります。お客さんは藤井さんが用意したシナリオを読みながら、映画の場面の中に入り込むように展覧会を体験します。5つのテーマに沿って展覧会を巡ると、日本と青森のこの100年の歴史を辿ることが出来るようになっていきます。

2 青森の人々が撮影した昭和の映像

本展では、関連プロジェクトとして昨年の秋から青森県内の皆さんに8ミリフィルムで撮影したホームムービーの提供を呼びかけてきました。これは、大阪を拠点に活動するremo（NPO法人記録と表現とメディアのための組織）のご協力を得ています。remoは、全国各地で家庭に眠る8ミリフィルムを発掘し上映会を行う活動をしており、今回はその活動を主宰する松本篤さんと一緒に、昨年の10月から12月にかけて青森県内の8ミリフィルム所有者のご自宅でお話をお伺いしながら上映会を行ってきました。

8ミリフィルムは昭和30-50年代に、家庭用の動画撮影機として普及していました。丁度日本の高度成長期と重なるこの時期の映像からは、どんどん変わっていく街並みや各家庭・地域の風習などを窺うことができます。

3 過去を知り現在を見つめ未来を考える

ゲストディレクターの藤井光さんは、映像を用いて社会問題や芸術と社会の関わり方に言及するような作品を手掛けてきました。特に東日本大震災後は、芸術を通じて福島の問題を考えるフェスティバル「プロジェクト FUKUSHIMA!」のドキュメンタリー映画や、被災地にある古い映画館についての地域の人々のインタビューを集めたドキュメンタリー映画「ASAHIZA」などを通して、震災後の社会や震災だけにはとどまらない日本の地方の歴史的・政治的問題について提示しています。

本展においても、所蔵品や映像を媒体に市井の人々の暮らしの歴史を提示することを試みます。展覧会を通して過去を知り、過去を知ることで現在を見つめ、未来について考えるような時間を過ごしていただけたら幸いです。

藤井光 (ふじい・ひかる)

1976年東京都生まれ。美術家／映画監督。パリ第8大学美学・芸術第三博士課程DEA卒。2005年帰国以降、現代日本の社会政治状況を映像メディアを用いて直截的に扱う表現活動を行う。3.11以降の被災地で災害と芸術の関わりをテーマに各地で撮影を続けている。

【関連イベント】

○オープニングトーク

日時：2月7日（土）14：30－16：00

ゲストディレクターの藤井光氏に加え、同時開催の展覧会「ヴィジョン・オブ・アオモリ」に参加する澤田サンダー氏、蒔苗正樹氏の3人のアーティストによるギャラリートツアーを行います。

【同時開催】

ヴィジョン・オブ・アオモリ vol.11「澤田サンダー echo」 会場：AV ルーム

ヴィジョン・オブ・アオモリ vol.12「蒔苗正樹展 Polylogue」 会場：ギャラリーB

2015年2月7日（土）－3月15日（日）10：00－18：00 会期中無休／無料

【お問合せ】

青森公立大学国際芸術センター青森

〒030-0134 青森市合子沢字山崎 152-6 TEL:017-764-5200 FAX:017-764-5201

MAIL: acac-1@acac-aomori.jp URL: <http://acac-aomori.jp/>

担当学芸員：服部浩之